

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 13年7月 ～生産の回復ペースは引き続き緩やか

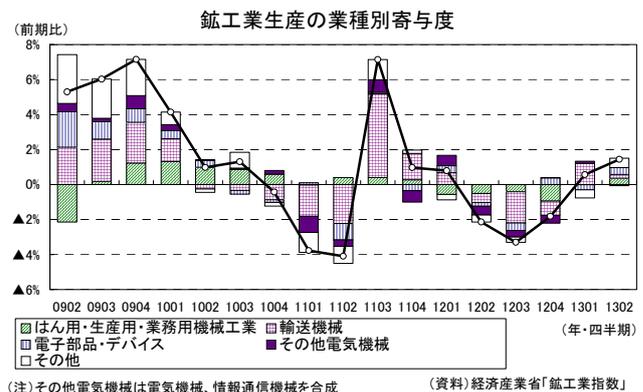
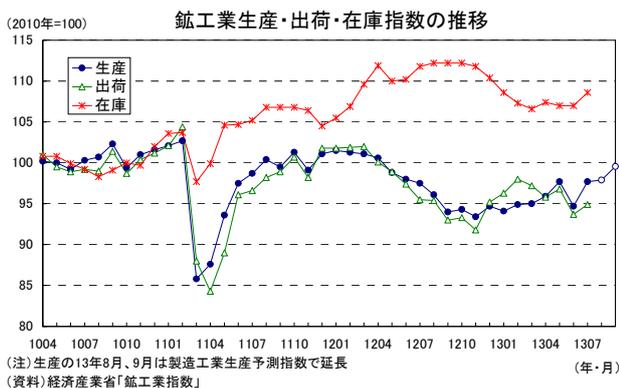
経済研究部 経済調査室長 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 生産の回復ペースは依然緩やか

経済産業省が8月30日に公表した鉱工業指数によると、13年7月の鉱工業生産指数は前月比3.2%と2ヵ月ぶりの上昇となったが、事前の市場予想（QUICK集計：前月比3.7%、当社予想も同3.7%）は若干下回った。出荷指数は前月比1.3%と2ヵ月ぶりの上昇、在庫指数は前月比1.5%と3ヵ月ぶりの上昇となった。7月の生産は高い伸びとなったが、6月の大幅な落ち込み（前月比▲3.1%）の反動による部分も大きく、景気の山であった12年春頃の水準を引き続き下回っている。輸出の伸び悩みを背景に鉱工業生産の回復ペースは依然として緩やかなものにとどまっていると判断される。

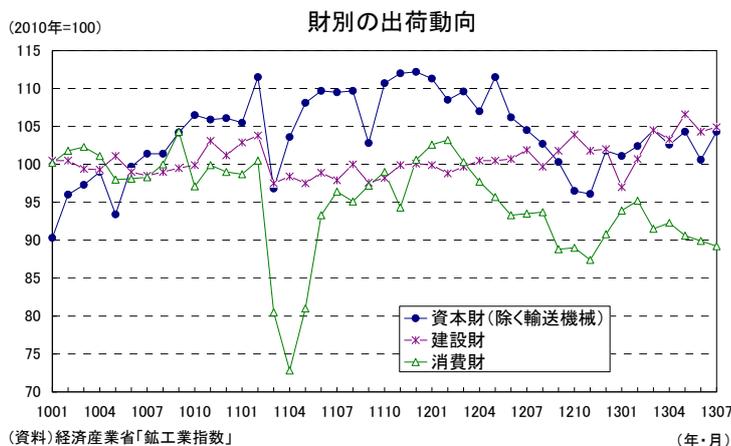
7月の生産を業種別に見ると、スマートフォンやタブレット端末向けの需要拡大を受けて、電子部品・デバイス（前月比7.8%）、情報通信機械（同9.1%）が高い伸びとなったほか、設備投資の下げ止まりを反映し、はん用・生産用・業務用機械も前月比5.5%となるなど、速報段階で公表される15業種中、12業種が前月比で上昇した（3業種が低下）。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は13年4-6月期の前期比▲0.2%の後、7月は前月比3.7%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は13年4-6月期の前期比4.0%の後、7月は前月比0.6%となった。GDP統計の設備投資は、12年1-3月期から13年4-6月期まで6四半期連続で減少しているが、13年入り後はほぼ下げ止まっており、7-9月期は7四半期ぶりの増加となる可能性が高いだろう（9/2公表予定の法人企業統計の結果次第では、4-6月期が増加となる可能性もある）。

消費財出荷指数は13年4-6月期の前期比▲2.8%の後、7月は前月比▲0.8%となった。耐久消費財（前月比▲1.8%）、非耐久消費財（前月比▲0.6%）ともに低下した。

個人消費はこれまで景気の牽引役となってきたが、ここにきてその勢いには陰りが出てきた。旅行、外食などのサービス消費が引き続き堅調に推移しているため、個人消費全体の増加基調は維持されていると判断されるが、13年1-3月期、4-6月期ともに前期比0.8%の高い伸びとなったGDP統計の個人消費は7-9月期には伸び率が大きく低下することが予想される。



2. 輸送機械の増産が一巡

製造工業生産予測指数は、13年8月が前月比0.2%、9月が同1.7%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（7月）、予測修正率（8月）はそれぞれ▲1.3%、▲0.2%といずれもマイナスとなった。

予測指数を業種別に見ると、8月は7月実績に続き電子部品・デバイス（前月比2.5%）、情報通信機械（同17.0%）のIT関連業種が牽引役となっている。9月は情報通信機械が前月比▲8.5%の大幅マイナスとなる一方、はん用・生産用・業務用機械（前月比6.0%）が全体を押し上げる形となっている。

12年末から13年初め頃にかけて生産の牽引役となっていた輸送機械は、新車投入効果の一巡などから国内販売の回復が頭打ちとなっていることもあり、7月の前月比1.9%の後、8月が同▲2.7%、9月が同3.4%と一進一退の動きとなっている。7-9月期は3四半期ぶりの減産となる可能性が高い。



13年7月の生産指数を8月、9月の予測指数で先延ばしすると、13年7-9月期は前期比2.4%となり、3四半期連続の増産となることはほぼ確実とみられる。ただし、生産計画が下方修正される傾向があることを考慮すると、実際には4-6月期（前期比1.5%）を若干上回る程度の伸びとなることが予想される。